

巻頭言 大学教育の発展についての理事会の展望とCETLへの期待と要望

理事長 田代 康則

新学習指導要領で学んだ高校生が大学に入学する2006年問題、統計上は誰もが大学に入学できる全入時代が始まる2007年問題——いずれにも通底する共通課題として、大学で受け入れる学生の多様化や学力の低下が懸念されている。逆説的に言えば、ユニバーサル化し、かつ激しい生き残り時代に入った大学界にあって、問題発見・解決能力や幅広い教養、語学力など、各大学が学生をどう教育して社会に送り出すのが重要課題としてクローズアップされている。そしてその取り組み自体が大学の個性となり、生き残りの鍵となることは言うまでもない。

創立35周年を迎え、「第二の草創期」としてのスタートを切った本学は建学の精神のさらなる深化と具現化に全学あげて邁進していきたい。まずは創価大学として教育の質保証を明示するため、教養や語学教育などについて、建学の精神を教育方針に反映した「創価大学スタンダード」の策定を進めている。

また経済学部と経営学部間の単位互換制度や、文学部を現在の5学科から1学科7専修に改編し、主専攻・副専攻制を導入する。これらは、

より学際的な幅広い学びの機会創出を目指して2007年度より開始する予定である。更に昨年末に設置したキャリア教育準備委員会が、キャリアアセンターとの強力な連携のもと、学生のキャリア教育のさらなる充実を目指したい。

更に35周年事業として、3年後の完成を目指して新総合体育館を建設するが、その次の目標として新総合教育棟の建設計画が発表されている。

本学の未来にとって重要かつ希望溢れる教育事業である。これらに対して教職員が一致団結して取り組んで参りたい。

教育・学習活動支援センター（CETL）は、教員に対する授業改善支援と学生に対する学習支援の2つのアプローチが先駆的取り組みとして、平成15年度の特徴GPに採択されたが、この双向向の取り組みのさらなる充実を期待している。

「学生にたいして責任のある態度をとらなければならない。さもなければ、人の子弟を誤らせることになる」——これは中国の周恩来総理が、諸大学の教員らに語った言葉であるが、創立者池田先生はこの言葉を引用され次のように

言われた。「教員の養成・訓練が大事である。教育は教員で決まる。学生にとって、最大の教育環境は教師自身である」と。さらに「人間教育の真髄は、一人ひとりの学生を大切にすることから始まる。教育者の大いなる誠実に接して、学生は大いなる成長を始めるものだ。教員の真剣な心、情熱の心が、学生の心を揺さぶり、活気づけ、可能性を伸ばしていく」と言われ、教

員自身の変革と成長に大きな期待を寄せた（平成18年1月2日創価大学協議会）。

教員が学生の目線に立ち、学生と一緒に人間的学問的向上を目指すことこそ「人間教育」を標榜する創価大学の根本姿勢であると考え、CETLへの期待と要請はますます高まっている。スタッフの皆さまの尚一層のご尽力を心よりお願いする次第である。

本年度第二回の教育サロンを開催

CETLでは過去数回、LTD話し合い学習法と呼ばれる協同学習の技法についてワークショップを行ってきました。本年度第二回の教育サロンは、その「LTD学習法」の実際を参観した先生方の意見交換の場となりました。

教育学部の関田一彦先生の授業（水曜2限、総合演習）を参観され、CETLアネックスでの教育サロンにもご参加いただいた工学部の伊藤真人先生より、感想をいただきました。

LTD学習法による授業の見学会に参加して

工学部 伊藤 真人

昨年11月16日に開催された授業見学会は、教育学部の関田一彦先生による「総合演習」だった。この授業は一部がLTD法による協同学習によって行われており、ちょうどLTDの回に見学が行われた。

今年度前期に見よう見まねでLTDの導入を試みたが、運営面でも効果の面でも、気になった点がいくつかあった。学生の側も今ひとつ物足りないものがあつたことが、授業アンケートからうかがえた。この見学会は、欠けていたものを見出す絶好の機会であると思われた。

何よりも強く印象に残ったのは、時間管理の巧みさだった。LTDはいくつかのフェイズから

なっているが、フェイズ毎の時間配分がずれると、間延びして緊張感を失ったり、逆に消化不良に終わったりする。こちらで時間を計って指示しても、時計係に任せても、なかなか思うにまかせなかったのだが、タイマーという小道具一つを各グループに使わせるだけで、見事にフェイズの区切りをつけていた。さらに、フェイズとフェイズの間で時おり学生を指名して、他の学生から聞いたことを総括させるなど、「聞く」ことに対して緊張感をもたせる工夫にも感心した。

また、開始時に班分けを行う方法、導入のあいさつを利用して時計係を決めるやり方など、

目立たないようで学生が自然に口を開き、授業に参加するように方向づける工夫が随所に見られ、大変に参考になった。

専門科目、特に工学部ではLTDを導入できる科目が多いとは思えない。たとえば、ともすれ

ば当番と担当教員との質疑応答になってしまう研究室のコロキウムに、ときおりLTDを導入すれば、メンバーの参加意識を高めることにつながりそうである。

本年度第三回サロンの教育サロンを開催

12月3日(火)、授業ポートフォリオの趣旨と活用方法をテーマに、本年度第三回の教育サロンが開催されました。

授業ポートフォリオは、本学でもはじめての

試みとなります。授業改善の試みを幅広く共有できる仕組みとして、大いに期待されています。

今回ご参加いただいた文学部の佐藤素子先生から感想が寄せられました。

掘れば足下に泉あり

文学部 佐藤 素子

大学教員として、常に学生のことを一番に念頭に置き、仕事をしなければならないと心掛けてきました。学問を学ぶことと人に教えることにはかなりの違いがあり、授業法に関して日々自分なりの模索と工夫をする事を心掛けて来ました。時間が経つと共に、収穫もあれば、課題として残るものも数多くあります。学外の学会に行けば多くの情報を入手することが可能ですが、機会は非常に限られています。このような時に、本校の教育・学習活動支援センターが身近な所で、教員に様々な勉強や意見交換の場を提供して下さり、それを知った時の嬉しさは今でも鮮明に記憶しています。

昨年11月女性大学教員のキャリア形成の国際比較プロジェクトの一環として、桜美林大学国際教育センターより李尚波先生を招き、「中国の女性大学教員——過去・現在・未来」をテーマ

にしたお話を聞くことができる機会があり、日本に隣接している中国の女性教員の状況を知ることによって、国際社会の中で働く大学女性教員としての立場や責任、そして女性教員が果たすべき役割を考えるきっかけになりました。

12月には創価大学授業ポートフォリオのプロジェクトとして、教育サロンが開かれました。ここではポートフォリオの作り方や留意点などを具体的な例をあげて解説していただき、集まった先生方はご自分の授業において、実際に創意工夫した教育法の実例を紹介したり、また疑問に感じることや、これからの課題について話し合いました。大変収穫の多い、有意義な時間でした。終わりに、参加者の皆さんは「もっとこのような機会が沢山あればいいね」などと口々に話していた記憶があります。

「創価大学授業ポートフォリオの創設につい

てのお知らせ」の中に「掘れば足下に泉あり」という俚諺を引用されていた。私が体験した学

習・研究サロンは、まさにその言葉の意味を感じさせてくれるものでした。

2005年度 CETL研修合宿の報告

文学部 清水 強志

年末、12月27・28日の両日にわたりCETL関係者による研修合宿を山梨県にて開催した。研修会では馬場善久副学長、坂本辰朗センター長を中心に、CETLの学生支援活動やFD活動に関する現状報告と改善点、および今後のCETLの展望について集中的に討議された。その他の参加者は、山崎純一教務部長、神立孝一副教務部長、関田一彦副センター長、池田秀彦教授（法学部）、小林孝次教授（経済学部）、吉川成司教授（教育学部）、岡田勇助教授（経営学部）、清水強志助手（文学部）である（計10名）。



まず、授業ポートフォリオの制作について討議された。ポートフォリオとは「折り畳み式の書類カバン」という意味であるが、シラバスをもとに講義の記録（配布物、授業のなかで出された課題・宿題、実際の授業風景、学生からの反応などを含む）を作成し（そういう意味でポ

ートフォリオといわれる）、最後にポートフォリオに基づく自己評価（工夫や配慮などの特記事項、授業者からのアピールなど）を書き留めたものである。

これは本学における授業実践例を保存し、他の教員への参考にしてもらうことを目的として本年度CETLがはじめて試みるものである（昨年10－11月に希望者を募り、すでに本年度の作成者は決まっているが、来年度は今回のポートフォリオを参考にして、より多くの教員によるポートフォリオの作成を呼びかける予定である）。研修会では、形式の統一および簡易性を測るため、基本項目に関してはホームページを利用して入力することなどが決定し、また内容および公開の仕方などについて討議された。

続いて、特色GP事業の外部評価を考慮した上でのCETLの自己点検および評価作業について討議された。来年度は特色GPに採用されて3年目、つまり最終年度になることをふまえ、外部評価を考慮しながら、これまでのCETLの学生支援活動やFD活動に関する現状報告と改善点について討議された。実際、「2006年問題」および「2007年問題」を目前にひかえ、創価大学の目指す大学像実現のためにCETLが果たしうべき役割とは何なのか、また創価大学のFD活動全般について様々な話題が提起された。（具体的な内容に関し

ては割愛するが、例えば、学生のタイムマネージメントについてCETLが関われないか、試験問題の公開について、外部評価を取り入れた授業見学会の開催などの話題が出た。）

その他、本年2月23日に行われる2005年度創価大学FDフォーラムや本年春の海外視察（2月予定）などについての内容が検討された。

2005年度FDフォーラムが開催されます

本年度も、教育・学習活動支援センター主催の「FDフォーラム」が開催されます（2月23日（木）本学本部棟）。4つのワークショップと基調講演に加え、今回はさらに各学部長のパネルトークが用意されています。日ごろの授業改善の成果を共有し、今後のFD活動の展望を開く、貴重な機会になると期待されます。

以下プログラムの内容を紹介します。

2005年度 FDフォーラム

時間	プログラム
9時	受付
9時半	W1) 図書館サイトからのデータベース活用2 W2) 授業ポートフォリオ in progress W3) 学習意欲を高める授業づくり W4) アメリカの大学で使われる協同学習法
12時	休憩
13時	学長挨拶 若江正三学長 基調講演 山田礼子（同志社大学） 「変動期の大学教育：学生への導入教育をどうするのか」
15時	パネルトーク 「各学部長が語る学部教育改善の方途」

W1) 図書館サイトからのデータベース活用 2

（M棟101教室 9時30分～12時）

講師：山口喜一郎（中央図書館）

コーディネーター：戸田龍樹（工学部）

図書館では、たくさんのデータベースを購読していますが、必ずしも有効活用されていない実情があります。W1) は、昨年好評をいただいたデータベースの活用法の続編です。

W2) 授業ポートフォリオ in progress

（M棟203教室 9時30分～12時）

講師：齋藤之美（経済学部）

コーディネーター：小林孝次（経済学部）

W2) では、ミクロ経済学の授業ポートフォリオがテーマです。授業ポートフォリオ制作の過程で明らかになった、教育・学習をめぐるさまざまな問題を考えます。

W3) 学習意欲を高める授業づくり

（M棟205教室 9時30分～12時）

講師：藤田哲也（法政大学）

コーディネーター：金子弘（文学部）

『大学基礎講座』（北大路書房）の編著者として知られる藤田先生から、学習意欲に関する心理学的知見に基づいた授業づくりの工夫について

てお話をいただきます。

W4) アメリカの大学で使われる協同学習法

(M棟202教室 9時30分～12時)

講師：関田一彦 (教育学部)

コーディネーター：尾崎秀夫 (WLC)

アメリカでは、協同学習法は、有力な指導法に定着しています。W4)では、『Collaborative Learning Techniques』に紹介されている技法を紹介します。

基調講演 変動期の大学教育

学生への導入教育をどうするのか

(M棟201教室13時～14時50分)

講師：山田礼子 (同志社大学)

日本の高等教育界で「導入教育」という考え方を定着させ、その理論と実践について積極的に発言されている山田礼子先生をお迎えして、この課題を考えます。

パネルトーク

各学部長が語る学部教育改善の方途

(M棟201教室15時～16時45分)

パネラー：各学部長

司会：神立孝一副教務部長

各学部長に、学部教育改善の取り組みについて、紹介していただきます。学部を超えた英知の結集の機会となることが期待されます。

Information

- ・2005年度FDフォーラムの参加申し込みについては、CETL滝川までご連絡ください。(内線2147 takikawa@soka.ac.jp) なお、CETLのホームページからも申し込みいただけます。
(<http://www.succ.soka.ac.jp/CETL/>)
- ・来年度のCETLの窓口業務は、4月6日から開始します。時間は12時30分～17時です。

編集後記

本年度もまもなく終了しますが、FDフォーラムという大仕事が残っています。大変革の年になる2006年度へ新たなステップを踏み出すために、大成功を期し尽力いたします。(S)

C. E. T. L. Quarterly No. 22

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター

〒192-8577 八王子市丹木町1-236

Tel: 0426 (91) 9782 内線 2146

E-mail: cetl@soka.ac.jp